

# く き よしたか 九鬼嘉隆 (天文 11 (1542) ~ 慶長 5 (1600) 年)



嘉隆像 (常安寺蔵)

九鬼嘉隆は、天文 11 (1542) 年に志摩国にて定隆の二男として生まれた。当時の志摩地域では、「嶋衆」と呼ばれる土豪衆が「一揆」と呼ばれる地侍達の地域的な連合組織を有していて、九鬼氏もその一勢力に過ぎなかった。兄浄隆の死後、その子の澄隆が跡を継いだものの、幼少のため嘉隆が後見役となり補佐していたが、周辺勢力に攻められ、志摩を追われた。その後、滝川一益を介して織田信長に仕えるようになったとされる。嘉隆は、信長が天下統一を目指す過程で、苦心していた長島の一方向一揆において、安宅船と呼ばれる軍船 10 艘を率いて攻め入り、要害を破り突破口を開いたことにより、織田水軍の将としてさらに活躍していくことになる。

天正 4 (1576) 年、大坂の石山本願寺との抗争である第 1 次木津川口の戦いで、毛利水軍に大敗した信長は、嘉隆に大安宅船 7 艘の建造を命じ、天正 6 (1578) 年に完成させた。この大船について、奈良興福寺多聞院(たもんいん)英俊らの手になる「多聞院日記」には、「伊勢を出港した大船が堺に入港した。横七間・堅十二、三間もあり、鉄砲の寛通を防ぐため鉄の船である」と記されていることから、「鉄甲船」としても知られているが、謎も多い。

同年 11 月 6 日、大船 7 艘を率いた嘉隆は毛利水軍と木津川河口にて一戦をまじえた。安宅船の堅牢さによって凌いだ嘉隆方が、敵船を引き付けて大鉄砲による砲撃を加え敵船を打ち崩したという。

この戦いの勝利によって、補給路を断たれた石山本願寺を降伏へと追い込むことになり、信長は天下統一にむけて大きく前進するとともに、嘉隆の九鬼水軍の名は全国に轟くこととなった。戦後、信長から、志摩国 7 島と摂津国野田、福島において 7 千石の加増を得たとあり、この頃から志摩国の支配を行うようになったとみられる。

信長の死後の天正 12 (1584) 年の小牧・長久手の戦いでは、羽柴秀吉方につき、それ以後、豊臣水軍として重用されることになる。

文禄元 (1592) 年の秀吉の朝鮮出兵の際、嘉隆は「日本丸」という大安宅船を中心とした大船団を率いて参陣した。長さ百十五尺五寸 (約 33m)、幅三十九尺 (約 11m) ほどで、大砲 3 門を装備、甲板上には指揮官の豪華な御殿があり、船首には楠で作られた龍頭が飾られていたという。しかし、現地での戦闘は、李舜臣による反撃に加え、同じ船奉行として参陣した脇坂や加藤らとの連携がとれず、苦戦を強いられた。

一方で、文禄 3 (1594) 年には、以前から築城していた自身の居城である鳥羽城が完成した。鳥羽城は 3 層の天守をもち、周囲を海に囲まれ、全国的にも珍しい大手門を海側に配した「海城」で、まさしく水軍の将にふさわしい城であった。

その後、慶長の役に嘉隆は出兵しなかったとみられ、慶長 2 (1597) 年に隠居料 5 千石を得て家督を子、守隆に譲り隠居する。

しかし、慶長 5 (1600) 年の関ヶ原の戦いの際、嘉隆は石田三成の再三に渡る懇願により、西軍についた。紀伊国新宮城主堀内氏善を従え、徳川家康方で上杉攻めに従って留守中にしていた守隆の鳥羽城を奪った。これにより父子の間で戦うことになり、9 月 11 日には加茂の船津 (現鳥羽市船津町) において守隆軍と戦った。西軍の敗北後、嘉隆は答志島へ逃れた。守隆は自己の戦功に代えて父の助命を家康に請い、許されたが助命の許しを伝える報が届く前に、嘉隆は答志島の洞泉庵にて切腹した。59 歳の生涯であった。現在、鳥羽の常安寺には墓所、答志島には嘉隆の首塚、胴塚が残っている。